

World Youth Day 体験記

はじめに

ワールドユースデー(WYD)とは、国連とヨハネ・パウロ二世の働きかけから始まった、世界的なキリスト教徒の若者のための祭典です(対象は、18歳～35歳)。2～3年ごとに、ある国の一都市の一教会に、世界中からクリスチャンの若者が集まり、ミサが行われます。毎回、100万人単位の若者が集まり、大規模な祭典となっています。同じ国の仲間と大聖堂を目指して、巡礼を行い、言葉や国の違いを超えて一か所に集まる人々に出会うことで、参加した青年たちは皆、信仰について特別な体験をしてきます。

池田教会からは4人の若者が参加しました。ここに載せているのは、参加した2人の大学生の手記です。



小川くんは、紹介文、手記(上)、(下)と、3回にわたって池田教会の広報誌からしだねに手記を載せてくれました。

ワールド・ユース・デーに参加して

小川僚太

8月7日から23日まで参加したワールド・ユース・デー(WYD)は私に様々なことを考えさせてくれるものでした。私はAコースから参加したのですが、前半の100kmの巡礼では毎日しんどいながらも、友達と話しながら歩いたことはとても楽しいものでした。巡礼の最終地点であるサンティアゴの大聖堂は素晴らしく、巡礼者の為に振られる香炉は巡礼の終わりを実感させてくれるものだったと思います。その後の



のWYD本大会では、世界中の青年と出会い、ともに祈りました。200万人とも言われる青年との最後の派遣ミサでは、祈りで静まり返る瞬間があり、感慨深い気持ちになったことが印象深く残っています。日本巡礼団では、日々カテケージス、分かち合いそしてミサを行いました。特に分かち合いは私にとって多くのことを残してくれたと思います。また日本中から集まった青年と友達になれたこともとても良かったです。



「WYDに参加すると何かが変わる」という言葉を事前準備会である神父様からお聞きしました。今振り返ると、確かにその通りだったと思います。なぜなら自分の中での信仰への変化というものを私自身感じたからです。2013年、ブラジルのリオデジャネイロで次回のWYDは開かれます。何か自分を変えたい、自分の信仰を考えたいという人には是非参加して何かをつかんで欲しいと思います。

そして最後になりましたが、今回WYDに参加するにあたり、私達を快く送り出して下さり、また支援までして下さった北摂地区と池田教会の皆様ありがとうございました。とても良い経験をすることができました。



JMJ2011 MADRIDに参加して思う (上)

小川 僚太

「今度マドリッドでWorld Youth Dayがあるから行ってきたら？」その母からの紹介と補助金付きでスペインに行けるというのに乗って私はWYDに参加することを決定した。表向きはそんな感じでひらりひらりと周りに理由を聞かれては適当に答えてきたが、本当の理由は別にある。

覚えている方もいるかもしれないが私は成人式の時、「やる気がないけど・・・」と挨拶した。その『やる気の無さ』、それは今まで私につきまわってきたカトリック教徒としてのスタンスである。幼児洗礼という、選択と抵抗の余地なく意識があったときからカトリック教徒、しかも毎週強制的に教会には連れて行かれる。そのような年月を重ねることで私の中にカトリックとしての何かは形成された。しかしその一方でキリスト教特有の不自然さ、奇跡、あり得なさをどう解釈するべきなのかを、歳を経て気づいた自分の中の現実主義的思考の中で整理できなくなり、時にはキリスト教に引いてしまうことがあるぐらい信仰は完璧に薄れて行った。そのような中で私は、いくら心の表面でキリスト教を嫌ったとしても、心の底には、もはや取り除くことができないキリスト教徒としての何かが存在しているという矛盾を抱えているということに気づき、その唯一の解決策は自分がもう切り離すことができないキリスト教に正面から正直に向き合い認めるということではないか感じていた。つまり私には信仰とキリスト教に向き合う勇気が無かったということである。

そんな矛盾を感じながら過ごしているとき、WYDを紹介された。Aコースにはポルトガルルートへの100kmの巡礼もあると分かったとき、すぐにAコースに決めた。なぜならそのような長い距離を歩くことは未知であったし、なによりもその巡礼を通じて自分の矛盾を解決できるのではないかと思ったからだ。

Aコースの集合は8月7日ヴィーゴというポルトガルに近い街であった。三々五々と集まってくる全国からの各教区のメンバーは総勢約160名であり、大阪教区内での知り合いは同じ池田教会からの山内君だけだったので、「さあどうしようか」という思いで巡礼は始まった。

巡礼の日々、Aコースで過ごした日々は今振り返ると特別なものである。朝の7時半からお昼にかけホタテ貝のマークを目印に毎日20～25kmを約12kgのバックパックを担いで宿まで歩く。時速約5km、平均4～5時間の巡礼。ただそれだけのことであったのであるが、友達と話しながら、時には一人内省しながら、そして誰と競うわけでもなく自分のペースで歩くということは貴重な体験であった。歩きながらた

わいもないことや将来のことなど、いろいろなことを話していたが、奇跡って信じる？みたいな話を夜にお酒を飲みながらしたりと、毎日がある意味分かち合いの日々の連続であった。巡礼の道程はまさに山あり谷あり、山道やごつごつ岩の地面の次はアスファルト、日差しのきつい日もあれば景色のきれいな日、単調な日もあってとても一様に語れる



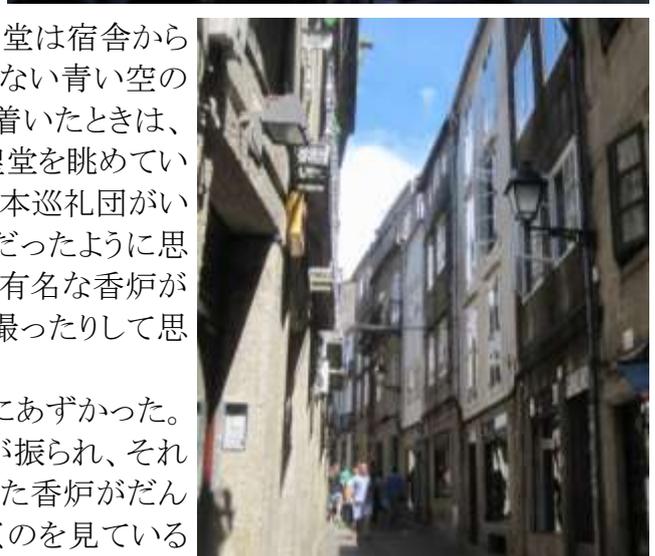
日々ではなかったが、毎日辛いときはあってもとても充実していた。

日本巡礼団は巡礼中、多くの地元メディアで取り上げられ、最終的にスペイン国営テレビにも取り上げられるほど大きな注目を引いていた。話によると、現地の人にとって日本人が大勢で巡礼しているのが不思議だということで、日本でいうお遍路を外国人が集団でしているみたいなものと言われ妙に納得してしまった。

到着した街では、夜は歩いた仲間とバルに飲みに行ってから寝ていた。スペインでは昼間は気温が40℃ぐらいまで上がり肌が焼けるように暑いのであるが夜の10時ごろには暗くなり、涼しくなってくる。そして0時ごろまでバルは賑わい、子ども達もうろうろしている。そんなスペインの夏の夜の過ごし方はゆったりしていてとても気持ちが良かった。

そして最終日、サンティアゴ到着の日はゴールする日にふさわしく空はとても晴れていた。さすがにこの頃になると、足の裏には水ぶくれが数個でき、舗装されていないじり道を一步一步進むには痛みがあったがそんなことはどうでも良かった。今日ゴールするのだという思いが先にあったのだ。この日も坂が多い日であったが、サンティアゴがついに見える橋に来たときは、あの街だ！と心の中で叫んだ。しかしそこからが本当に遠かった。サンティアゴの大聖堂は旧市街にあり、その周りには新市街に囲まれているので、まずその新市街にたどりつかないといけないのだ。くねくね細い道を通って遠回りしながらたどり着いた新市街は急な坂ばかり、しかも大聖堂に行く前に荷物を先に置こうと地図片手に宿舎を目指したのだが、道を聞いた人には間違った道を教えられてなかなかたどりつくことはできなかった。しかも宿舎に着いたのは良いものの、まだ宿舎は開きませんとのことで少し休憩した後、友だちと大聖堂を目指した。大聖堂は宿舎から旧市街を10分ほど歩いたところにあった。雲一つない青い空の下、そびえ立つサンティアゴの大聖堂までたどり着いたときは、思わず笑ってしまった。すげーやっとならんと大聖堂を眺めていた。大聖堂前広場には無事に先にたどり着いた日本巡礼団がいて、みなそれぞれにどこかすっきり安堵した表情だったように思う。大聖堂の中はとても美しく、祭壇の前にはあの有名な香炉が吊られていて、多くの巡礼者は祈ったり、写真を撮ったりして思い思いに過ごしていた。

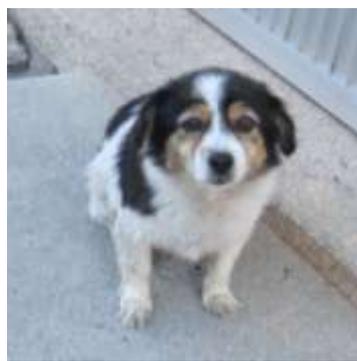
その日の夜は大聖堂でインターナショナルミサにあずかった。ミサの最後には巡礼者のためにあの大きな香炉が振られ、それはとても感慨深いものであった。大きく振られていた香炉がだんだんとゆっくりとなり、振りも小さくなり止まっていくのを見ている



と、『巡礼は終わった。もう歩かなくて良いんだ。』というほっとした思いと、『巡礼がなくなってしまった。もうあの日々には戻れない。』というどこか寂しい思いが入り混ざった気持ちになった。そしてその日のお酒が格別に楽しかったことは言うまでもない。

サンティアゴでは二日間の自由時間があり、一日目はあいにく曇ってはいたが地の果てと呼ばれるユーラシア大陸の西の果てを見に行き、海の幸を食べた。そこで食べたパエリアやスープ、そしてプルポ(タコ)は今までで一番おいしく、それを食べにくるだけでも価値があったのではないかと思う。二日目はサンティアゴの街でお土産を買い、大聖堂でミサにあずかり、お昼を食べて、雨が降ってきたので宿舎に帰宅。そして夜には伝統音楽の路上ライブを見に行きサンティアゴでの最後の夜はふけていった。

「巡礼の日々は、苦しいときもあれば楽しいときもある。それは人生と一緒にです。」この言葉は本大会が始まってからあった日本巡礼団での赦しの秘跡のときに神父様から言われたものである。毎日歩いては足の痛さに耐え、宿について達成感、喜びを感じる。まだ私はたった20年しか生きていないけれど、人生はそういうものだよ言葉だけでなく身体を通じて少し感じる事ができた。それはこれから先、「そんなものだよ人生は」って思うときの参考資料になるのかなと思っている。たった100kmの巡礼であったが学ぶものが多く良い経験であった。



JMJ2011 MADRIDに参加して思う (下)

小川 僚太

翌日はマドリッドまでの移動日。サンティアゴがある緑の多いガリシア地方から荒涼とした草原に低い木が点在している乾燥した地方にあるマドリッドへの風景の変化は驚くものであった。

ここからはBコースからのメンバーも合流して総勢300人の日本巡礼団となり、WYD本大会がついに始まった。

始めに正直に言うと、WYD本大会自体はあまり私にとって何か残してくれたというものでは無かった。それよりもむしろ、日本巡礼団として毎日行ったカテケージスや分かち合いの方がとても実りのあるものであったと思う。日本巡礼団には全国各地から5人の司教様が参加しており、司教様が持ち回りでカテケージスは行われた。まず事前に指名されていた教区がアニメーションとして信仰に基づく簡単な劇をし、司教様の講話があり、その後それらの内容についてグループで分かち合いをしてミサにあずかるというのが一連の流れであった。グループは事務局によって事前に決められていて、AコースBコースの参加者が混ぜられた9人1グループであり、各グループには神父かシスターは必ず入るという構成となっていた。分かち合いは、各自カテケージスの内容について思ったことを言うというスタイルで私のグループは行ったが、それに縛られることなく、自由な雰囲気ですべてを話し合った。

その中で一つ印象に残っている分かち合いがある。その日のアニメーションは鹿児島教区が担当で、ある人がキリスト教というのは何事ともポジティブに捉えるということと話していた。その時に私が思ったことは、「キリスト教というのは神という装置を設定して、ただの偶然も含めて何事も神の導きとしてポジティブに意味付けて捉えるが、もしそれが仮に例えば交通事故での突然の死などであるとしたらそれはどう解釈するべきか」ということだった。それを分かち合いのときに私のグループメンバーだった埼玉教区の所沢教会の藤田神父に尋ねたところ、上手くは言えないけれど「それは

韓流ドラマで事故が必ず起こって恋人同士の絆が深まるのに似ていて、残され者の事故のつらさというものはその人が本当の信仰にたどり着くための過程となる」という返事があった。そして今度は沖縄教区の青年が友だちを事故で亡くしたことで自分の信仰を考えたという話をして深まったところで、アウシュビッツでの心理学者の経験が書かれた『夜と霧』のように人間は極限状態になると神をいろいろなところで感じるようになるという話に展開して行き、自分としても気づきがあった。



この藤田神父は正直に言って神父っぽくない人でとても親しみやすく、また私が常日頃感じている腑に落ちないキリスト教的不可思議なことを質問しても、いろいろ答えてくれとても勉強になった。またある夜は同じグループでAコースから一緒に、私と境遇が似ていて中学高校時代は「キリスト教とか意味不明」と反発していたという過去を持ってい



る社会人の方と、キリスト教の不思議な点について色々と話したことで、キリスト教と聖書を学ぶ必要性を感じた。それは現実的な見方をしてしまう私にとって、薄々気づいていた「頭で奇跡などは解釈をしないと信仰は保てない」ということをよりはっきり意識させた。私は普通に考えてありえないことを一定の理解無く信じていることができる人間ではないのだ。

WYD本大会のプログラムは教皇ミサまでの数日間、毎日気温が下がってくる20時頃から始まり22時ごろに終るといったものであった。午前中から昼過ぎまでの日本巡礼団のプログラムの後に宿舎を出発し、20時までは観光、そしてWYDのプログラム(開会ミサ、十字架の道行き)に22時ごろまでかかってそれから晩ご飯という毎日であった。そのため宿舎に戻るのには1時を過ぎるといときもあった。WYDのプログラム自体は、街を歩き疲れた後の上に周りは人だらけ、スペイン語は分からない、説教が異様に長い、人が多すぎて宿舎まで帰るのが大変、地面にはゴミが日が経つにつれてあふれていく、そして熱中症続出していたところで救急車のサイレンが聞こえるといった感じであった。そして疲れている時には、どこでも会うイタリア人かスペイン人が電車の中だろうが人で渋滞しているところであろうがおかまいなく全員で歌を大声で歌いだし、そのうるささにイライラさせられた。個人的にはその人の多さから、もうプログラムには行きたくないと思っただけなのに初日の開会ミサの時点で思ったのだが、そんなことは許されるはずなく、その日以降プログラムが終る少し前にはさっさと人波に飲まれる前に抜けて帰るようにしていた。まだ私はこの時点では教皇様は画面で確認するだけであったが、画面で初めて見た感想を言えば、「ふーんあの人がカトリックのトップか。」という感じで別に周りみたいに感動する訳でも騒ぐ訳でもなかった。

教皇ミサは前日の夜の夕べの祈りから始まった。会場はクワトビエントス空港という今は使われていない空港であった。昼過ぎに出発したのだが、それが大きな失敗で、日本巡礼団が割り当てられたC5エリアには、他の国の人々がこのブロックに割り当てられていないのにも関わらず入り込んでいて、もはや日本巡礼団はほとんど入れなかった。そのため大多数の人はC5前の道に場所をとることになった。C5というエリアは前から3列目のブロックであり、このような良い場所が割り当てられたのは東日本大震災があったからだ聞いた。しかし良い場所といっても舞台に見える教皇様は赤く2cmくらいに見えるだけであった。

夕べの祈りの日の夜は天気が悪く、祈りの最中には横殴りの激しい雨に見舞われ、友だちと銀マットを傘代わりにしてなんとか雨をしのいでいた。そしてその雨の後、教皇様(もちろん雨に当たる訳がない)がそんな雨のことを恵みの雨と言ったことにはイラッとした。さすがポジティブ宗教である。その夜は道で寝て、翌日の朝早くには教皇様が乗る車がその道を通るということでそこから追いつき、入れる確証もないエリアを運営側から指定されて押し込められた。私は運良くC5には入れたのだが、ほとんどの人がこの時点でばらばらになってしまっていた。

教皇ミサは朝から行われた。平和の挨拶を各国の人と行ったことや、200万人の青年によって創りだされた祈りの雰囲気を感じられたことは素晴らしいとは思ったが、それ以上にだんだんと上ってくる太陽の強い日差しとそれによってみるみる上がって行く気温で疲れ、正直言うと早くミサが終わって帰ろうかばかり考えていた。砂埃は激しく、ゴミは地面にあふれてそこかしこにゴミ山ができ、運営にはうんざりして、いろいろ思い出すが、毎回そういうものらしい。1回行けば十分である。

『自分の中の矛盾の解決と自分の信仰に向きあう勇気』これがWYDで私が求めたものであった。それに対して私は、巡礼と日々のミサ、そして分かち合いを通じて自分なりの答えを出すことができた。まずは前半『自分の中の矛盾の解決』についての答え、それは「別に矛盾は抱えていてもよい。本当に

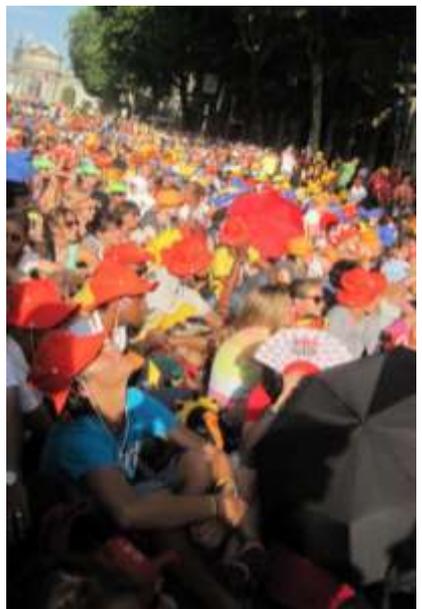


宗教に頼りたくなるような苦しいときに帰ってくるところがあるだけ幸せである。またその矛盾は少しずつ解消されてきている。」である。たいしたことのない答えではあるが、今はこれで私は良いと思う。そして後半の『自分の信仰に向きあう勇気』も達成することができた。巡礼中の3日目くらいに心の壁がこじ開けられ、ミサに真っすぐと向かうことができて来たと感じたのだ。それは今までの反発が何であつたのかと思うほどあつけなかつた。全国から集



まった同年代の青年、しかもほぼ全員カトリック信者、そういう特別で特殊な空間だったからこそ私は向き合う勇気を得たのだと思う。どこかマイノリティ宗教に引け目を感じ、教会に行っても同年代はいなくて周りの年齢層はとて高き何にも楽しくないと思っていたが、この空間だけは特別で、ある種の安心感を感じ、キリスト教に向きあうことに何も抵抗がなかつた。また戻りたいと思える空間だった。

WYDを通して何かが変わったという感想をよく聞くがそれは間違っていない。神や聖霊の導きだとか恵みだとか言ってそれを解釈していくのは個人的にあまり好きではないけれど、私が得たものをただの心境の変化によるものだとするには少し出来すぎている気もする。そして100km歩いたことを共有した友だちは、友だちというより仲間という表現の方が正しく、彼らと過ごした最終日までの日々は忘れられないものとなった。WYDで生まれた人々との絆をいつまでも大切にしたい。いろいろな意味で普段の現実世界に戻って来た今、自分の変化をいつまで維持できるか分からないがしばらくは以前よりは少し真面目になるつもりである。



次回のWYDは2013年、ブラジルのリオデジャネイロで開催される。是非池田教会からも青年に参加してもらいたい。一つ私のように達成したいことをもって参加すれば、終わったころには何かが変わっているはずである。私の場合、それはWYDでしか変えることはできなかったのではないかと感じている。日本と世界中の青年と出会い、ありえない規模の人達と共に祈る。一度経験する価値はある。

参加した全国各地の青年の話を聞いていると、池田教会の青年活動は特殊な状況だと感じた。私もあまり人のことを言える立場ではないが、まず青年を教会でほとんど見たことが無い、分かち合い自体やったことがない(私はWYDのための事前学習会で初めて経験した)、また大阪教区では毎月青年の集まりを開いているといったことや、ネットワークミーティングといった全国的な青年の集まりが行われているといったことは初めてWYDで聞いて知った。他にもまだあるがそのような情報が青年に流れてこない池田教会はとて青年育成に力を入れている教会だとは言えないのではないだろうか。その体質の結果が今の教会の青年の状態の一つの原因でもある。青年の主体性にまかせるといふ名目のもと、教会が今の青年の現状を黙認しているように感じる。青年と教会、お互いに変わる必要があるのではないだろうか。

以上がWYDに参加して私が経験したこと、そして感じたことである。自分とキリスト教について考えることができ、キリスト教を客観的に話し合せて、カトリックの良い面も悪い面も見て、友だちが全国にできて、いろいろあつた17日間はあつたというまだった。この感想文はその要約と思って書き出したのだが、



途中で要約では全体としてWYDがどのようなものだったか伝えきれないと思い、一通り書き、このような屈折した長文になってしまった。また池田教会に関しては思ったまま書いたため、事実未確認の

記述もあるが、ご理解いただきたい。

そして最後になりましたが、私をWYDに送り出してくださった池田教会のみなさまと、今回参加するにあたって補助金を出してくださった北摂地区、大阪教区のみなさまにこの場をかりてお礼申し上げます。素晴らしい経験ができました。本当にありがとうございました。



WYD体験記

山内翔平

私は8月3日から9月3日までの1ヶ月間スペインに行き、サンティアゴ・デ・コンポステーラを目指す徒歩100kmの巡礼とマドリッドで開催されたWYDに参加し、その後バルセロナなどを一人で旅をした。出発直前、ホテルの手配や荷物の整理など、旅に行く準備が整いいろいろ考えていると、私は不安な気持ちのほうが大きくなり本当に大丈夫だろうか、向こうに行ってやって行けるかどうか心配になった。そしてついに8月4日マドリッドに着いた。空港についてすぐに地下鉄を乗り継いで予約していたホテルに向かったが、かなり迷って1時間ぐらい探してやっと見つけた。なかなか見つからなかったのがかなり焦った。ホテルの場所がわかりにくく、ホテルの人と上手くコミュニケーションが取れなくて困った。8月6日から始まった巡礼では毎日20km以上の道のりを歩いた。道中は見るものすべてが新鮮でおもしろく、日本には体験できないことばかりで毎日楽しく巡礼をすることができた。最終日は毎日歩いてきて疲労が溜まったせいか、最後の道のりはとても辛く、長く感じたが、大聖堂に着いた時には着いた喜びと達成感で、疲れているのを忘れてしまうほど感動した。

大聖堂に着いてミサに参加すると、いろんな国の人々がミサに参加していて、その光景を見て私は感動した。産まれたところや皮膚や目の色も違うし、相手の言葉もわからないけれど、この瞬間はお互いわかりあえたのではないかと思ひ涙が出そうになった。

WYDでは班での行動だったが、私の班は足を怪我してしまう人や熱中症になってしまう人が出るなどのハプニングの連続だった。ハプニングがありすぎてWYDの期間中に何をやったか覚えていないぐらい大変だった。

そのお陰で私は心身ともにボロボロになるまで疲れ、WYDは苦行なのかと本当に心が折れそうになり、逃げ出したくなった時もあった。

でもあの班で本当に良かったと今は思う。たぶん他の班だったら途中で分裂していたのではないかと……。本当に皆には助けて貰った。皆に心からお礼を言いたい。

「神様は乗り越えられる試練しか与えない」という言葉を聞いたことがあるが、今思えば本当にそうなのかもしれないと思う。一人の力では乗り越えられない試練を皆とだから乗り越えられたのだと。私の中ではサンティアゴまで徒歩100kmの巡礼より、このWYDの方が何倍もしんどかった。でも、このWYDを通して人間的に成長出来たと思う。この巡礼とWYDに導いてくれた神様に本当に感謝しています。

私はWYDに参加するかどうか迷っている人はぜひ、参加してほしいと思います。

参加すればいろんな意味で貴重な体験ができますし、大変な苦労があるけれど、とても楽しく友達もたくさんできると思うので、ぜひ参加してほしいです。

最後にWYDに参加するのに援助してくれた教会の皆様に、心からお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。おかげ様で素晴らしい体験をすることができました。

付録 最後の一人旅中、バルセロナで神戸から来たある御夫婦に出会った。

昨年(2010年)の12月25日、私はそのご夫婦の家に招待された。WYDが私にくれたクリスマスプレゼントだった。

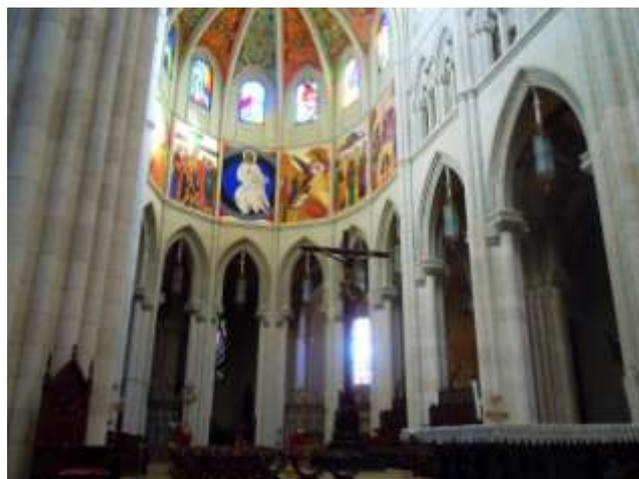


☆巡礼写真集☆

山内翔平くんが巡礼の旅で撮った選りすぐりのスペイン写真です。山内くんはマドリッド、サンチャゴ・デ・コンポステーラのあと、トレド、バルセロナにも行って、各地の教会に足を運んだようです。



WYDで世界中から集まった若者たちと、彼らのためのミサが開かれたマドリッドのカテドラル。カテドラルは、天井が高く、壁画とステンドグラスが美しいですね。





自分の国の仲間たちとサンチャゴ巡礼に出発！



自分の生活に最低限必要なものだけを自分で背負い、ひたすら歩く。



巡礼路には、サンチャゴまでの距離の書かれた石塔がいくつも立っています。



↑ 宿泊施設にはこんな場所もあります。





サンチャゴ・デ・コンポステーラ

最終目的地、サンチャゴ大聖堂。
壮大で、威厳あふれる建物です。

下の2枚は、聖ヤコブの聖遺物の入った棺と、
聖ヤコブの説教台。



古都トレド

郊外からみた古都トレドと、トレドのカテドラル写真



モンセラット教会

バルセロナ郊外の山の中にある教会。
有名な黒いマリア像があります。



バルセロナ

言わずと知れた大建築、聖家族教会、サグラダ・ファミリアです。

